

日英言語文化比較の一側面

A Practical Issue in "Comparative Study of English and Japanese Language in Culture"

坂内 正
Tadashi Bannai

ABSTRACT

The aim of this paper is an analysis and study of the actual function of a "Brief Questionnaires and Quick Response" system in a course on "Comparative Study of English and Japanese Language in Culture." The analysis is carried out in order to address educational questions such as "how can we encourage students to speak out assertively in English?"

In order to realize the practical goals of the course, we should make the most of the "Brief Questionnaires and Quick Response" system, taking note of the following points:

- a) We should make students realize that words are the most important medium of communication in Western society.
- b) We should encourage students to speak out assertively on any subject in English without the fear that they might commit faults in grammar, in pronunciation or in choice of words.
- c) We should make students become aware that they can utilize loan words from English when speaking in English.

The analysis and study also show that this "Brief Questionnaires and Quick Response" system should have a positive influence on students' attitudes toward the course itself and toward English in general.

Key Words: "Brief Questionnaires and Quick Response" system, practical goals of the course, speak out assertively in English, loan words from English

§1 はじめに

英文学科学生を対象とする学科専門科目の一つとして、「日英言語文化比較」を開講し担当し続けてきた。その目的は、主として比較言語学的なアカデミックな面での学びと、文化人類学あるいは社会学的な「異文化理解と受容」経験をもつことにより人間と社会についての認識を深めさせることにあるが、さらにもう一つ、英語学習者である彼らに発話への積極的な姿勢をもたせ、かつその方向性を確かなものにして

やりたいという、実際的な願いもあった。

本稿の目的は、先にその方法論を述べその結果への考察を加えた『日英言語文化比較』という科目の講義における「毎時間のカード提出方式（フィードバック方式）」¹⁾について、この「願い」の視点からその実際的な機能についての分析と考察をすることである。講義の実際的な「願い」を実現するためには§2で示される諸点に留意しつつ「フィードバック方式」を最大限に活用すべきであると考え、留意す

べき諸点」が正鵠を得ているのかどうか、検証の対象である。

また本稿は「フィードバックによって学生たちに与えられた情報がどのような意識（認識）の変化を学生たちにもたらし得るか」についても分析と考察を加えていくが、その分析と考察は、「フィードバック方式」が学生たちの講義そのものに対する意識や英語学習全般に対する姿勢に関して肯定的な影響を与えることを、示すことになるはずである。

§ 2 仮説と論証の手順

学習者に英語での発話を促し、積極的な姿勢をもたせること。言い誤りを恐れるあまりの緘黙を防ぐために、有効な予防ワクチンの認識をもたせること。またわが国がアメリカ合衆国の文化圏内にほぼ位置付けられ、かつ希有の外来語（カタカナ語）花盛りの現状にあるのを、この際、活かすこと。そのためには、以下の諸点が肝要と考えられる。

- a) 有効かつ有意義なコミュニケーションのために言葉はどうしても必要な道具であること・しかもその認識が欧米では特に強いこと、に気づかせることが重要である。
- b) 発音や文法面での多少の言い誤り（または非標準性）は許容される場合が多くまた語彙選択の不適切ささえ（多くは相手からの問い返しによる確認を必要条件としつつも）許容され得ること、をしっかりと認識させる必要がある。
- c) 外来語（カタカナ語）の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。3つの作業とは、
 - 1) 英語以外の外国語（＝オランダ語やドイツ語・フランス語など）からの外来語の識別と、標準的な英語表現の習得
 - 2) 和製英語の識別と、標準的な英語表現

の習得

- 3) 「カタカナ英語」の発音のズレや語義の狭まりなどをのり越え、標準的な発音と英語圏での一般的な語義の理解に近づけようとする、弛みない気配りと実践のことである。

上記の「肝要と考えられる」諸点について、§ 3において詳述する方法により、§ 4において分析と検証を加えることとする。さらに§ 5での「フィードバックによって学生たちに与えられた情報がどのような意識（認識）の変化を学生たちにもたらし得るか」についての考察を踏まえて、§ 6においては論述のまとめをおこない、「肝要と考えられる」諸点が正しく肝要であったのかどうかについて、論証していく。

§ 3 分析と検証の方法

§ 2で述べた仮説に基づいて、分析と検証をすすめる。具体的には上記 a) b) c) それぞれについて関わりの深い「質疑応答」（提出されたカードに記された疑問や感想への、講義担当者からの回答やコメント。すなわち【フィードバック】の実例の中からできる限り特徴的なものを採り上げて、そのフィードバックが講義の展開（ながれ）の中で果たした役割もしくはそれを採り上げた講義担当者の狙い及びその成否を、明らかにしていこうとするものである。

例を示すに際しては、「質疑応答」の回答文は原文（カード提出の翌週の講義開始時に学生たちに配布したプリントの中の文章）のままで引用とし、原則的には省略や要約は避ける。「も」などのささやかな語に込めたニュアンスや、「但し書き」を効果的に使おうとするなどの書き方への配慮なども、読んで明らかないように示したいからである。

分析と検証は、それぞれの「質疑応答」例ひとつひとつの提示の前後におこなうが、必要に

応じて「講義の展開（ながれ）の中でその疑問や感想が生まれた事情」や「質問者もしくはその感想を述べた者に関する何らかの事情」の確認をおこない、また「他の学生たちにおける同種の反応の有無もしくは全く逆の反応の有無」などについても、述べることにする。さらに実際の講義時間内での補足的説明のこと・その場で生じた学生たちとのさらなる発展的会話の様子なども、必要に応じて付け加えていく。

とりわけ、プリントと補足的説明によって「ある学生の疑問や感想がたちまちに受講生全体にシェアされ・かつ回答もまた全体にシェアされるという有機的な相互作用」を目指す気持ちが講義担当者にはあり、それが実現できた例についてはそのことを事実として述べ、それに対する考察も必要があれば加えていくつもりである。

§ 4 講義の展開とフィードバックの実際

- a) 有効かつ有意義なコミュニケーションのために言葉はどうしても必要な道具であること・しかもその認識が欧米では特に強いこと、に気づかせることが重要である。

この点での質疑応答は、主として講義の展開の最初におこなわれた。“Introduction”部分での「より良きコミュニケーションのために」における「寡黙な日本人たちと饒舌な欧米人たち」という話を中心とした教授者からのアピールによって。また日本人の英語学習者が陥りがちな、完璧主義や減点方式の評価を恐れるがゆえの引込み思案や遠慮さらに「言わなくても察してもらえるだろう」という「甘え」の構造の、指摘に際して。

4-a-1 (問)「日本人は日本語での会話もヘタ」ってという話は、結局どういう意味で「言語文化比較」なんですか？(回答)もう一

度きちんと説明しておきましょう。講義の中でふれたのは、典型的な女子高校生グループの会話について「内容の希薄さ」

や「かみあっていなくても平気」といった問題点を指摘した上で、ある意味で対照的な「男は黙ってサッポロビール!!」などという（ふた昔ぐらい前に）超バカ受けたキャッチコピーを持ち出して、『以心伝心』とか『不言実行』といった表現にも通じる「言葉によるコミュニケーションを重く見ない」日本文化について、ということでした。一種の文化論を展開したわけだったのです。また別の例を挙げれば、日本の社会ではいわゆる「会議」が「率直な意見の交換による合意形成の場」になりにくい、という認識もこの問題の理解を助けられます。つまり会議の前の「根回し」とか・会議の席で「誰が」「どんな」言い方をしたかによって結論が違ってくる、という事実を考えると、下っ端の者は他人の前でハッキリとものを言わないほうが良い・流れに沿うほうが無難だ・出る杭は打たれる・「言わぬが花」・「もの言えは唇寒し」という感覚(文化)になるわけです。なんかイヤになっちゃうな、って気がしませんか？

学生たちはまだまだ社会のようすを分かっているわけではない。しかし両親など家族の言動を見聞きし、また報道で伝えられる世の中のできごとにもふれる中で、あるいは学生たち自身がこれまでに経験してきた人間関係を思い返すことによって、日本の社会での「言葉によるコミュニケーション」の現時点での位置付けを認識することは十分に可能である。

なぜ会話そのものがヘタになってしまったのかについて、「日本が孤立した島国でしかも鎖国と封建制度が長く続いたから」というのが大

きな理由のひとつであること、すなわち他の国々や地域から違う文化（＝考え方・暮らし方・もののやり方）をもつ人々がやってきて「触れ合い・受け入れ合う」という経験がきわめて乏しかったからであろうと推定できると、説明した。知り尽くした自然環境と社会環境の中で・祖父母あるいはもっと昔の時代の祖先のことまでお互いに知っているといった人間関係の中で生きていくのに、言葉(会話)によるコミュニケーションはあまり必要がなかったであろうこと、そのうえさらに上下関係が固定的な社会だったため、4-a-1の最後に述べたような感覚(文化)が生まれてしまったと考えられることも、補足的に説明しておいた。

4-a-2 ((問)女子高校生の場合は会話のキャッチボールではなくエンドレスなパスをしているように感じます。((回答)お見事です！ 実にうまい比喻ですね。そのとおり、会話とは言葉のキャッチボールであるべきで、言ってみればどういう「間(ま)」で・どういう種類のボールを(直球？カーブ？スライダー？)・どのくらいのスピードで・どこに投げてくれるか(受け止めやすい位置かどうか？)を確かめながら、楽しく相手の考え方や人柄を知ったり自分にとっての新しい知識を吸収したりするもの、ですよね？もちろんそれは同時に自分から相手にもそれらを伝えているわけで。でもパッパッと手近な人にパスしたテキストに話題をつまみ食いして口をはさむだけのおしゃべりって、結局はむなしい気がします。仲間意識の共有・連帯感を確認するという意味でのその場かぎりのエンターテインメント性は、まあそれなりに意義を認めるにしてもね。

この回答とともに、「出し抜こうとする」こ

すっからいサーブや破壊的スマッシュぬきの卓球やテニスの「ラリー」を楽しむことによく似た、会話の楽しさについても語って聞かせた。スポーツの場合は健康増進というおまけがつき・会話の場合には知見の広がりというおまけがつくことにも、留意を求めた。

4-a-3 ((問)友達と会話していると「楽しいけれどよく考えると内容がうすい」ことが、確かにある。／その場の雰囲気や仲間という安心感を得るために会話している(ことが多い)気がする。((回答)そういった種類の会話は「決して全面的に否定されるべきものではない」と思います。さまざまなゲームのほとんどがそういう「楽しいけど内容は」的なものですし、たとえば『ピバリーヒルズ青春白書』などを観ていると、アメリカの若者たちもけっこうそんな会話をしていることがわかります。ただし、会話は時にはかなりゲーム性を含むものの、会話全体がゲームだったり会話の最終目的がゲームであるはずはない、ということをしっかり確認しておきたいのです。会話は何よりもまず【お互いを理解し合う機会】なのです。そのことをしっかり踏まえて、限りある「若者としての貴重な時間」を大切に使うようにしていきましょう。

*「理解し合う」ことは「同じ考えになる」こととは別です。もし認識の違いがあることが分かれば「どういう違いで・なぜその違いがあるのか」を理解し合えば、良いのです。「いっしょだね(仲間だね)」ごっことは、別次元です。

「おしゃべり」の楽しさを否定するのではなく、ときおりの「有意義な・中身の濃い」会話への誘い(いざない)となれば、幸いである。

b) 発音や文法面での多少の言い誤り（または非標準性）は許容される場合が多く、また語彙選択の不適切ささえ（多くは相手からの問い返しによる確認を必要条件としつつも）許容され得ること、をしっかりと認識させる必要がある。

この点での質疑応答は、講義の展開のさまざまな局面でくりかえし何度も、やりとりがあった。講義の“Introduction”部分での『より良いコミュニケーションのために』においては「コミュニケーションの中心は伝達の内容」という話から、『音韻の面からみた日英語の比較』の章では、日本人の英語学習者にとって習得の難しい英語発音を、英米人の日本語学習者にとって習得が難しい日本語発音と対照してみる中で、また、英語が『国際語』としての役割を果たしていることの確認作業において、さらにまた『言語の変遷』を扱うに際して。

4-b-1 ((問))英語って『英語』なのにどうしてアメリカ英語が定着しているんですか？
／アメリカ英語とイギリス英語の違いで、アメリカ英語が低くみられる場合があるようですが、どうしてなんですか？／国際語として使われているのは米語だから、これからも米語を身につけたいと思います。
((回答))アメリカ英語が「定着して」いるのは、コンピュータ用語・航空用語・医療用語などいくつかの分野でのことです。世界最強の軍事大国かつ世界最強の貿易国という背景のもとにアメリカ英語が広く通用していることは事実ですが、通用している理由の根本には、かつてイギリスが『大英帝国』として世界中に植民地をもち、それらの植民地が後に独立を勝ち取るに際しては英語（イギリス語）を公用語とする国々が数多く誕生する結果を生じたこと、すなわち広大な英語の通用圏をイギリスが用意

しておいた、という事実があるのです。オーストラリア・ニュージーランド・インド・シンガポールなどなど、イギリス英語が「定着して」いる国や使用人口の多さを、見逃してはなりません。次に「アメリカ英語が低くみられる場合」があることの原因についてですが、“fill in”→“fill out”の例や be 動詞否定形→“ain't”の多用などが『文法の乱れ』と考えられていることとか、water [t]→[l]、twenty [t]→[n] などの違いが「くずれた発音」とみなされていること、等が挙げられます。まあ、どちらを中心に学び身につけるかは、あくまでも「個人の好み」の問題でしょう。

いずれも学生たちがよく抱く素朴な疑問であり意識であるが、「定着」の意味・多様な英語の存在といったことにもしっかりと目を向けさせたい、との思いで回答している。

4-b-2 ((問))日本語の『ふいんき（雰囲気）』
『さざんか』みたいな例は英語にはないんですか？ ((回答))あります。定着してしまっただけとしては“bird”が代表的です。もともと“bryd(d)”だったのが語尾の発音が弱まっていくとともに音位転換がおきて“byrd”となり、さらに [y]音が弱まって [r]音と結び付いてしまい、現在のような発音のものになってしまったのです。外来語（フランス語からの）としての“marble”（大理石、おはじき）の場合だと、“marbre”の [r]音が1つは [a]音と結び付きもう1つは [l]音に変化してしまっています。音位転換・脱落・弱化・無音化・消失などは、どの言語にも起きています。

音位転換や音の脱落などは学生たちにとっても興味がわく分野のようで、身近な日本語の例

から説明してやると、反応は上々である。

4-b-3 《問》標準語=共通語=正しい言葉づかい?疑問があります。《回答》日本語の場合、現代の標準語のもとになった言葉づかいは明治政府の権力によって国語学者たちが定めました。それ以来、方言をなくしていこうとする運動(教育)がほぼ一貫して教育行政の側からおすすめてられています。しかしこの30年間ほど「正しいとか美しいとかは主観的な言い方にすぎない。意志を伝え合う便利さのために共通語は必要だが、それはなにも『標準』ということではなく、逆に言えば、方言を良くないもの・汚いものとする考え方は非科学的・非論理的であるばかりでなく言葉の豊かさへの冒険でもある」とする認識が徐々にひろまっています。ちなみにイギリスには“RP”と呼ばれるものがありますが、これは王室の方々やBBCの放送でアナウンサーが使っている英語です。一般の人々の使う英語と貴族階級の英語の違いは著しいものがありますし(階級方言)、また地域ごとの違い(地域方言)も、たいへん大きいのです。なおアメリカには「中西部・東部・南部・西海岸」の4つの地域方言があると言われており、このうちの「中西部方言」が、標準的アメリカ英語と考えられています。

さらに、地域方言の区分にはさらに小さな地域(町や村)ごとの「なまり」も数えきれないほど存在していることにも(日本語の場合と同様に、本人たちはあまり意識していないが)、注意を促した。さらにイギリス英語の多様性は想像以上で、厳密な方言区分をしていくとアメリカ英語の場合のような「これが多数派だ」と言える方言が無くなってしまおうといった状態であることを説明し、しかしながら多くのイギリ

ス人たちは英語の多様性をかなり意識していて、それらの「なまり」あるいは特性を「階級(身分)方言」と併せて人物理解に役立つ手掛かりと考えている、という情報も与えた。

またこの質疑応答に関連して、『ザンギ』や『角食(カクシヨク)』といった北海道方言のことや『雑煮』のモチの形を例にとり、「生活の中の多くのこまごまとしたことに、家庭による・地域による・国による違いがあり得る」という点にも、注意を促した。

発音や言葉の意味等が地域によって違いがある場合に、“ethnocentrism”的に自分のもつ「常識」を基準にして判断を下すことはありがちなことであるけれど、気がついてみれば誰もが何かの点で少数派なのである。しかし多数派にすりよるのではなく「わが家の独自の文化」「自分らしさのある発話」をそのままにもち続けていってほしい。しかしそれは時として「これは良い! これもまた良い」と感じたことを各自が新たに取り入れていくことを妨げるものでは決してなく、むしろそうすることこそが、より豊かで多様性に富んだ文化を全体として創りあげていく道すじと、なるのである。

c) 外来語(カタカナ語)の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。

1) 英語以外の外国語(=オランダ語やドイツ語・フランス語など)からの外来語の識別と、標準的な英語表現の習得

あまりにも多くの英語からの外来語にとり囲まれて育った今日の学生たちも、英語以外の外国語からの外来語が存在することに、フツと気づくことがある。そして時には、さらに「あてはまる日本語は無いの? どうして無いの?」と疑問を深めることも、ある。

4-c-1-1 《問》小学生のとき『パン』が英語じゃないことを知った時はびっくりしましたが、あてはまる日本語は無いのでしょうか？《回答》ポルトガル語に由来する『パン』という言葉ですが（ちなみに同じラテン系言語のフランス語でもパンですね）、強いて日本語にすれば『麩麩（めんぼう）・麵包』と呼ぶこともできます。お年寄りのなかにはこの言葉を知っている人が居るかもしれません。でもほとんど死語ですよね。

4-c-1-2 《問》ポルトガル語からの外来語があるなんて知りませんでした。《回答》『天ぷら』はポルトガル語“têmporas”が語源です。『ボタン』もポルトガル語“botão”が語源で英語の“button”からの外来語ではありません。実は、ポルトガル語からの外来語はものすごくたくさんあります。間違いなく、オランダ語からのものより多いですよ。

ポルトガルやオランダと日本との鎖国時代の長崎『出島』での接触については、言われると何となくおぼろげに思い出す程度である（ましてやその前の時代に流入した少なからぬ外来語については、流入があったという事実さえまったく認識されていない）。医学を初めとする『蘭学』の存在やその影響についても、あまり認識されてはいない。

4-c-1-3 《問》『コップ』がオランダ語からの外来語だったとは知りませんでした。《回答》英語の“cup”にあたる語ですね。オランダ語では“kop”と綴ったようです。『ゴム』もオランダ語の“gom”で、英語からは『ガム』というものとして“gum”が入ってきました。『ピンセット』もよく知られた外来語ですが、オランダ語の

“pincet”からきたものです。英語では“tweezers”と呼びます。船などの『タラップ（乗降用のはしご）』もオランダ語“trap”からだそうで、英語だと“ramp”になります。また身近なものでは『スコップ』が“schop”からで、『コルク』は“kurk”からです。英語だとそれぞれ“shovel”、“cork”となります。なお、実に意外なことに『ビール』も、オランダ語“bier”からの外来語だったのです。

4-c-1-4 《問》英会話の先生に『アンケート』と言ったら通じませんでした。英語だと思って使っていたけど、和製英語だったんですね。《回答》違います、フランス語からの外来語です。フランス語の“enquête”が語源です。英語では“questionnaire”と言います。

フランス語からの外来語には、『アベック』や『シュークリーム』など本来の意味から離れていたり奇妙な英語化があったりするものがある。また『ズボン』が元からの日本語だと思われているような学生が、けっこう多い。“jupon”というフランス語からの外来語だと説明しても、半信半疑の表情をうかべたりする。

4-c-1-5 《問》『イデオロギー』は英語でも日本語でも同じ意味ですか？《回答》外来語の『イデオロギー』は、ドイツ語からのものです。日本へのこの言葉の紹介のされ方（翻訳本の出版など）からみて明らかに、ドイツ語からなのです。英語は「アイデオロジー」みたいな発音で、意味はほぼ同じです。発音的には『エネルギー』（ドイツ語からの外来語）と英語の“energy”[エナジー]の関係にちょうど重なりますね。ついでに言うと、『エネルギー』という言葉も外来語として入って来ていてこれ

を英語の形容詞だと思い込んでいる人もあるようですが、これも実はドイツ語からのもので、英語での形容詞は“energetic”です。

ドイツ語からの外来語は医学の分野に多いという印象が強くそれはそれで間違っていないが、『ピッケル (Pickel)』などの登山に関する語もあれば上記のような語もある。

4-c-1-6 ((問))マフィアの登場する映画とか・日本語の文章の中でも時々、『ドン』という言葉が出てきます。英語の“boss”と同じような意味だと思うんですが、語源は何ですか？((回答))『ドン』はスペイン語“don”からの外来語で、ラテン語“dominus”の【主 (=神)・主 (あるじ)】の意味から、スペイン語では男子に対する敬称として使われていたものです。日本語の文脈では【首領】の意味を表します。英語でも【大人物】の意味で使われることがあります。これはイタリア語 (やはりラテン語から派生した言語です) “dón”が英語に取り入れられたものです。現在の日本語の中でのこの言葉の普及は、むしろ英語からの外来語と、言うべきかもしれません。

スペイン語やイタリア語 (例『ピザ “pizza”』など) が、いったん英語に取り込まれてから日本語のなかに外来語として入って来る場合も、かなりある。

4-c-1-7 ((問))『ジャンケン』が外来語だと聞いたことがあります。((回答))中国語からの外来語です。『両拳 (りゃんけん)』という発音がなまった (=語頭の [r]発音が日本語になじまないので置き換えた) という

説が、有力なようです。『石拳』が語源という説もあります。やり方は、中国から入って来たそのままのようですね。

中国語から日本語に入ってきた言葉は、『馬』や『椅子』などのやや意外なものも含めてほぼ無数にあると言ってもよいが、子供の『手遊び』にまでそれが見られるということの意味を考えさせたいとも、願っている。²⁾

c) 外来語 (カタカナ語) の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。
2) 和製英語の識別と、標準的な英語表現の習得

4-c-2-1 ((問))『ワイシャツ』は和製英語だとのことですが、Tシャツは『Tシャツ』って書くのにどうしてYシャツは『ワイシャツ』と書くんですか？((回答))やはり語源への意識が働いて「Tシャツの“T”は文字の形から来ているけど、ワイシャツの“Y”はどうも文字の形とは関係ないらしい」と感じているから、というのが回答なら話は簡単なのですが、そうではなさそうです。『ワイシャツ』のほうは日本語に取り入れられて年月が過ぎているため日本語らしいカタカナのみの表記になっている、と理解してください。それに対してTシャツのほうはまだ新参者で、しかも“T”という発音がお年寄りには難しい (→だから「外国語」意識が強い)、いっぽう若者たちにとってこの発音はいかにも英語っぽい (→だから「外国語」意識が強い)、故に『Tシャツ』でも『チーシャツ』でもない『ワイシャツ』のままなのです。

『Tシャツ』というものは日本人が発明したものだ、などという根拠不明の情報が某テレビ

番組で流されたことや。学生たちも何かと発言したいこと質問したいこといっぱいの「和製英語」に関わる分野の話は、「カタカナ英語で語彙力UP!」といった内容の講義展開の中で取り扱われた。

4-c-2-2 ((問))「シャープペンシル」は英語では“a mechanical pencil”と言うそうですね。【シャープペンシル】という呼び方はどこから来たんですか? ((回答))これは日本人が考えた商品名だったのです。たぶん、“sharp” (鋭い、鉛筆の芯がとがっている)を頭に思いうかべてのネーミングだったのでしょうかね。

英語風の(英語を組み合わせた)商品名が氾濫している、現代の日本である。さらにその商品名が普通名詞化してしまうこともよくあるが、それが「セメダイン」→「ボンド」のように変遷を示すことが観察される場合があることにも、注意を促しておいた。

4-c-2-3 ((問))バージン・ロードって和製英語ですか? Mr.〇〇にこの言葉を言ったら「日本語はおもしろいねえ」と笑いながら言われました。((回答))和製英語です。そもそも礼拝堂の中の通路に敷かれたあの(たいていは赤い色の)細長い絨毯(じゅうたん)の上を「バージン」が歩く、という発想そのものからして怪しげな感じがしませんか?

学生たちもさまざまな和製英語に関する情報を得ている。時には個人的な経験もあつての学びが、全体にシェアされることになる。

4-c-2-4 ((問))「マリッジ・リング」って言葉は英語にもあるんですか? それとも和製

英語ですか? ((回答))これは和製英語です。結婚指輪を指す言葉としては“wedding ring”が使われています。まあ通じないこともないかとは思いますが。ついでに「婚約指輪」のほうも確認しておきましょう。【エンゲージ・リング】じゃなくて、“engagement ring”です。和製英語がたまたま本当の英語に近かった例の、ひとつですね。

4-c-2-5 ((問))“guarantee”は【保証】の意味なのに芸能人の出演料の意味で「ギャラ」になるのはなぜですか? ((回答))ショウ・ビジネスの世界では、もともと入場料収入に応じた出演料というのが原則だったはずですが。つまり芸のすばらしさや人気度によって客の数が変動しますから、出演料もそのときどきで変わるわけです。でもそれだけだと芸人の収入がいつも不安定で生活が保証されませんから、芸人を出演させる側は「最低でもこれだけの金額は保証しますよ」と申し出て、出演交渉をするようになったようです。現在は(特に日本では)客の数による出演料の上乗せがないにもかかわらず、【最低保証】の意味の“guarantee”を【出演料】の意味で使っているようです。

たしかに英語ではあるのに、意味が狭まっていたり語尾がちょっと違っていたり。また【シーチキン】なる物はどこの国からの外来語なのか、といったような質問もある。名付けた人の意図としては、“sea chicken”(→海で獲れた、鶏肉のように低脂肪だよ)ぐらいの意味をこめたのだろうが、英単語が材料ではあっても、和製英語は和製英語である。正確には、日本だけで通用する商品名。短縮した「ギャラ」と同様、外国では通じない。

4-c-2-6 ((問))『ケータイ』やPHSのことは英語で何て言うんですか? ((回答))『セルラーフォン』と呼んでいました。もしかして商品名なのか、またこの語がどんな綴りなのか、PHSと『ケータイ』は区別がされているのかいないのか、詳しくはわかりません。ちなみに以前流行していた『ポケ・ベル』は英語で“beeper”と言います。“pocket bell”なんていくら英語っぽく発音してみても、絶対に理解されませんのでご注意ください。

時流に敏感なのは、若い人たちだから当然といえば当然か。

c) 外来語(カタカナ語)の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。

3) 「カタカナ英語」の発音のズレや語義の狭まりなどをのり越え、標準的な発音と英語圏での一般的な語義の理解に近づけようとする、弛みない気配りと実践

4-c-3-1 ((問))『フリーマーケット』という言葉の「フリー」の部分はfleaですかfreeですか? ((回答))これはもう、確実にfleaです。「蚤の市」という日本語訳があるくらいですからね。

「幼児期からの英語学習者でない限り、日本人の英語学習者にとっては[r]音と[l]音の聞き分け・発音のし分けが非常に困難である」とは言い古された事であるが、むしろこんな言葉をカタカナ語として導入する必然性があるのかどうか、『蚤の市』ではいけないのか、という点が気になる。しかしここでは『フリーマーケット』という語が既に日本語の中に外来語として

入って来てしまっている以上、この場合の「フリー」が『蚤(ノミ)』であることをきちんと知っておくことしか、対処法はなからう。

4-c-3-2 ((問))『ヴェポラップ』というスースーする薬がありますが、外国からきたものですか? ((回答))そうです、まぎれもなく外国からきた薬です。風邪をひいたときなどにノドから胸にかけて塗る薬のことですよね?“vapor”というのは『蒸気』とか『吸入薬』の意味なので、この薬の名を付ける際には、そのことを意識していたに違いありません。“Vaporub”という綴りなので、正しい発音は『ヴェポラッ』です、念のため。[b][d][g]は破裂音(閉鎖音ともいう)の有声音ですが、日本人はどういうわけかこれらの音を[p][t][k]と無音化して発音してしまうことがあるようです。

例: ベット (bed) ・ドック (dog)

市販薬までも英米での英語名そのままのものがあるというのは、「日本が現在アメリカ英語圏に入っている」ということの、典型的な一例である。西洋医学に基づく薬の場合は洋風の(カタカナの)名前をつけるというのが日本では普通になっているが、遠く太平洋を隔てての隣国との関係は、ここまで深まっている。

4-c-3-3 ((問))外国の地名や人名をカタカナで表して発音してみるとnativeが発音するのとかかなり違いがあるのはなぜですか? ((回答))いくつかの要素があります。まず日本語には子音連続がほとんど無いので、音節文字である(原則的に[子音+母音]を1つの文字で表している)カタカナを見ながら発音しようとする、どうしても原音には存在しない母音をはさみこんでしま

いがち、という点です。また、日本語はモーラ言語なので二重母音を2拍に発音してしまいがち、という点も見逃せません。さらに母音の数が少ない日本語に慣れた私たちは、つい、外国語のさまざまな母音をアイウエオで代用してしまいがちです。そのうえ、/f/や/v/の音やthの音、/r/音の響かせ方など、日本語に無い音の発音が不正確にまたはごごちなくなってしまうがちです。さらにあと1点、英語の強さアクセントをうまく再現できない(というより「弱く発音する」部分をうまく弱められない)という問題もあります。以上の点をよく訓練すれば、英語らしい発音になるわけです。

コメントの最後の文にある「英語らしい発音」というのは「ある程度までは」という意味であり、つまりは「たいていの英米人に通じる程度の発音ができれば良い」ということである。「英語を身につけようとするのはコミュニケーションのためであって、なにも英米人になろうとしているわけではないんだよ」そんな補足説明が、意外と大切である。

4-c-3-4 質問のあった、いくつかのカタカナ語について(回答)

- ・【バック・マージン】→仕入れの代金を支払った後で、売上高に応じてメーカー側または卸問屋から小売店に払い戻されるお金のことです。日本語で『売上報奨金』と言えば、分かりやすいでしょうか。「マージン」は“margin”です。
- ・【コピー機】→“copier/copying machine”が正しい英語で、日本語の【～機】という造語(法)に外来語を結びつけた、合成語です。【複写機】とも言います。
- ・【ハイウェイ】→“highway”は幹線道

路をさすのが普通です。また主に西海岸で使われる“freeway”という語は(無料)高速道路のことです。ただし“free”は「無料」のことではなくて「速度(制限がなく)自由の」という意味のようです。なお、日本では今のところ高速道路はすべて有料ですから、外国人に誤解を与えることを避けるために、英語の表示では“expressway”(有料高速道路)となっています。

- ・【マンション】→言うまでもなく日本語では【(高級)アパート】のことです。前にもお話ししたように、“mansion”は【大邸宅】の意味ですから、英語で話す時には要注意。なお【億ション】という言葉が一部の人たちの間で使われるようですが、これは駄ジャレのセンスによって造語されたもので、一般のマンションを【万ション】(数千万円で購入できるマンション)と呼んでいるように見立てて、購入価格が1億円を越えるものを、そんなふうと呼んでいるわけです。
- ・【セコハン】→英語からの外来語で“secondhand”から。【中古品】のこと。
- *こうして眺めると、カタカナ語(外来語)を使わなくて良いものもありますね。

学ぶことに貪欲な者たちは、さまざまな言葉に知的な興味を抱くようになっていく。しかしその背景にある現象としての「カタカナ語の氾濫」こそ実は気にすべきことであり、最後の蛇足のようなコメントが、学習者たちに教授者が最も考えさせたかったことだったとも、言える。

§ 5 考察

この章においては、「フィードバックによっ

て学生たちに与えられた情報がどのような意識（認識）の変化を学生たちにもたらし得るか」について、考察を加えていく。

まず最初に、前章での「a）有効かつ有意義なコミュニケーションのために言葉はどうしても必要な道具であること・しかもその認識が欧米では特に強いこと、に気づかせることが重要である」に関わる質疑応答の分析からさらに歩を進めて、フィードバックの効果を見ていく。ここでもまた、質問と回答の実例を基に論を進めたい。

学生たちは、教授者による「言葉によるコミュニケーションの重要性」への注意喚起を受け、いっそう強く「どうやってそれを身につけるか」を直截的に問いかけてくる。

5-a-1 ((問))ズバリ、英会話が上手になるコツはなんですか？((回答))ある話題についての英語での会話に十分に参加できなかったという場合、実は日本語でもその話題だと何も話せない、ということが多いものです。要するに会話の中身が問題だ、と僕が指摘したことの典型的な例です。きみがそうしたように「ふだんからもっとニュースに関心をもとう・新聞を読もう・いろんな知識をもつようにしよう」とすることはもちろん大事ですが、さらに一つアドバイスさせてもらえば、そういった場面での態度として「その話題についてよく知らないの、私。一緒に考えてみたいから教えてください。」というぐあいに率直に自分の立場を明言することをお薦めします。あまり度重なるとあきれられ・うんざりされるでしょうが、たまになら「あ、積極的に会話に加わろうとしているんだ。率直に自分の無知を告げる誠実さも、好ましい感じがする」と受けとめてもらえるはず。「自

分自身の意見というものを持ってない人だ」とか「会話に入ってこない、社交性の乏しい人なんだ」といった誤解は、避けられるでしょう。なお、英会話が上手になるのには、発音が標準的なものに近いほうが望ましいことは当然ですが、むしろ語彙の豊富さや知識や発想の豊かさのほうが、適切で豊かなコミュニケーションのために必要な資質だということを、よく覚えておいてください。

この質疑応答の紹介へのさらなる質問として「英会話が上手になれない理由は、先生の言う『日本人は会話そのものが苦手なんだ』ということの他にもあるのでは？」というものがあつたが、ほとんどの日本人は学校教育を離れば外国人と英語で話す機会など一生涯無いという事実を指摘し、機会そのものがめつたにないことすれば「慣れる」ことなど不可能であり上手になるはずもないこと、を補足説明した。また日本は植民地ではないので（駐留米軍の多さと文化的状況はそれに近いけれど）英会話の絶対的な必要性もなく・それなりに日本語で出版事業も放送も高等教育も行われているので英語が得意であっても特権的な利益に結び付けられるわけではないことも指摘し、つまりは英会話が上手になったとしても自己満足のもしくは純粋に知的な見返り（コミュニケーションの喜び・達成感など）しか無いに等しいため、習得意欲を強く保っていくことが難しいということも、補足説明した。

また言わば根本的な問いかけにあたる、日本的なコミュニケーションのありようを貫くことの提案も、あつた。

5-a-2 ((問))日本人特有のコミュニケーションのやり方を、無理にアメリカっぽくする必要はないのでは？((回答))う～ん、難しい

問題ですね。基本としては、日本語で話す時と英語で話す時とでモードを切り替える、というのが現実的なやり方ですね。そうすれば、どちらの場合もきちんとコミュニケーションができるわけですから。ただ、うっかりして英語モードで日本人と日本語での会話をしてしまうと、「自分の考えをはっきり言い過ぎる」とか「言葉が多過ぎる」とか非難されたり、ときには人格まで「ずうずうしい人だ」などと攻撃されかねません。また貴女の言うように、「日本人らしく英語を話してアメリカ人に接して、それはそれで理解してもらえ」れば良いのですが、それは特定の親しくなった相手の場合にだけ、受け入れられ誤解されずにすむやり方です。しばしば 5-a-1 の後半で挙げたような誤解をうけるのが実情です。それぞれの社会が、コミュニケーションのやり方での『個人差』に対して、もっともっと許容度の高いものになってくれると良いですね。

いわゆる“identity”の問題に関わることであり、一方では「帰国子女の順応・不適応」問題といった実際的な異文化衝突の事例に関わる質問（提案）でも、あった。結局は『モードの切り替え』を薦めることが現実的な助言になる、と信ずるものの、社会が『個人差』に対して許容度を高めてくれる方向への見通しが決して明るくはないことに、あらためて気づかされたのであった。

次に、「b」発音や文法面での多少の言い誤り（または非標準性）は許容される場合が多くまた語彙選択の不適切ささえ（多くは相手からの問い返しによる確認を必要条件としつつも）許容され得ること、をしっかりと認識させる必要がある」に関わる質疑応答が学生たちにもた

らした意識（認識）の変化を、見てみる。この点での学生たちの認識の確立については、極めて特徴的なやりとりが実現している。

5-b-1 《問》なぜ日本人はアメリカ英語を学んでいるのですか？《回答》50年あまり前の第2次世界大戦終了時、アメリカ軍を主体とする連合軍によって占領されたこと・日本の民主化をねらいとしたある意味での「教育」のために日本で大量のアメリカ映画が上映されたこと・多数の【留学生】をアメリカに招いて（英語教師たちを含む）生活様式や価値観に触れさせたこと 等が背景として考えられます。またこの50年あまりの軍事的・経済的な「アメリカひとり勝ち状態」の影響はとても大きいと言えます。なお前に説明したとおり、アメリカ以外のイギリスの旧植民地だった地域では依然として、イギリス英語が主流なのです。

4-b-1では旧イギリス植民地で英語を公用語とする国々となったものが多いことに触れたが、質問者は、日本が現在アメリカ英語圏に入っていることを素直に「なぜ？」と尋ねている。たしかに、4-c-3-2へのコメントでふれたような状況は存在しているが、日本は（フィリピンなどとは違って）公式にはアメリカの植民地だったわけではない。

5-b-2 《問》知り合ったマレーシアの人が、【私の英語にはマレーシアエッセンスがあるのよ】と、話してくれました。その人が“dialect”や“accent”でなく（＝【なまり】ではなく）“essence”と言ったことに嬉しさを感じました。《回答》実は【母語】であっても完璧に標準語（共通語）を話せる人などほとんどいないのです。たとえばアメリカ人だからといって標準的なアメリカ

カ英語を話すとは限りません。発音や語彙、さらには文法的にも、「地域方言」や「階級（生まれ育った家庭の所得レベルや生活の仕方の違いを含む）方言」が存在します。個人的な発音の「癖」もあれば、年齢層による語彙の違い、さらに社会的立場とか場面の雰囲気など、さまざまな条件が【標準的アメリカ英語】から個人個人を遠ざけている、というのが実情です。僕たちが日本語で話すのだってそうでしょう？これを日本人の英語にあてはめてみれば、つまり、日本語の発音特徴が加わった英語であっても「中身のある話だったら」コミュニケーションは成立する、ということなのです！

メッセージは実に明瞭。そしてこの学生は、その「知り合ったマレーシアの人」と英語でコミュニケーションしているのである。国際共通語としての英語で。英語にはさまざまな言語の“essence”を含んだものがあるんだ、と皆が実感できた、エピソードであった。

続いて、「c」外来語（カタカナ語）の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。1) 英語以外の外国語（＝オランダ語やドイツ語・フランス語など）からの外来語の識別と、標準的な英語表現の習得」に関わる質疑応答と、さらにそのフィードバックが学生たちにどのような反応と意識（認識）の変化をもたらしたかを、見てみよう。

5-c-1-1 ((問))日本人はなぜ、同じ語源の外来語を使い分けるようになったのですか？
 ((回答))それは、「その外来語が日本にはいつてきた時期の違いによるもの」がほとんどでしょう。たとえば【ガラス】は、すでに江戸時代にはオランダ語“glas”から

日本語の中に入って来ていました（一般庶民の暮らしにはほとんど無関係でしたが）。明治になって英語の“glass”【グラス】が入って来たとき、この言葉の指すものは主に酒類を飲むときのガラス製の器に限られることになってしまいました。その例外は【ステンド・グラス】ですが、日本語的な使い分けからすれば当然【ガラス】と呼ぶべきものではあっても、明治の世になって突然いくつも建てられたキリスト教会の美しくも装飾性豊かな物語り絵ガラスは、その目新しさのゆえに、【ステンド・グラス】という呼び名ごと受け入れられたのでした。同様に、【ゴム】と同じ語源の【ガム】は50余年前に第二次世界大戦の後の進駐軍（アメリカ軍）がもたらしたものですし、【カルタ】（ポルトガル語）は400年も前から日本語に入って来ていてほとんど日本語になりきった感じさえしていますが、一方、【カルテ】（ドイツ語）は明治になってからの外来語で、当時の医療の最先端にあったドイツ医学のにおいを残しつつ、現在に至っているのです。³⁾

外来語の使い分けについて関心が高いことは、「【バイト】と【パート】の違いは何ですか？」といった質問とそれへの回答が多数の学生たちの深いうなづきに迎えられたことによっても、証明されている。

また北海道という土地柄か、ロシア語からの外来語に目を向ける学生たちもいる。

5-c-1-2 ((問))ロシア語からの外来語ってどういふのがありますか？((回答))【イクラ（本来は「魚卵」の意味）】【カチャーシャ（本来は女性の愛称→“エカチュリーナ”）】【ノルマ（本来は「基準」の意味）】【ベチカ】【マトリョーシカ（“入れ子人形”、実は日

本の「こけし」にヒントを得たもの』と
いったところでしょうか。ほとんどが生活
のしかた全般にかかわるものではなく『モ
ノ』『非常に具体性をもったもの』であり、
また数も少ないようです。

さらには、日本語の成立と系譜に関わり・ま
た日本という国が少数民族とどのように向かい
合ってきたのかに由来する、微妙な問題を含む
質問もなされる。

5-c-1-3 ((問))アイヌ語は「外来語」として扱
うんですか? / 「外来語」をソトカラキタ
コトバととるなら、アイヌ語は違うので
は? ((回答))この場合のソトは、ある言語
(体系)の外という意味です。アイヌ語に
ついてはその起源も、実際の発音・文法・
語彙も、まだまだ十分には解明されていま
せん。語彙の面で日本語にかなり影響を与
えていることは、少しずつ明らかになって
(=日本人も認めざるを得なくなって)き
たところですが、依然としてアイヌ民族・
アイヌ語の無視あるいは日本人・日本語へ
の都合のよい同一視が続いているのが、現
状です(日本語への影響例:カムイ→神、
バスイ→箸[もとは中国語])。いずれ研究
が進めばはっきりすることですが、現時点
で既に明らかな事実として、「日本語とア
イヌ語とでは語族も違い、どちらか一方が
他方に含まれるといった関係ではない」と
いうことを、覚えておいてください。

次に「c) 外来語(カタカナ語)の知識を活
用させること。具体的には、活用を可能にする
3つの作業をたびたび意識させること。2)和製
英語の識別と、標準的な英語表現の習得」に関
わる質問と回答についての前章での分析を踏ま
え、そのフィードバックが学生たちにどのよう

な反応をさらに引き起こしたかを、見てみる。

この c) の 2) についての学生たちの認識の
変化については、双方にとって『目からウロ
コ』的なものが多かった。以下はフィードバッ
クを経ての質疑応答の一部である。

5-c-2-1 ((問))《4-c-2-6》に関連して。断言は
できないけど、ロンドンに行ったとき、語
学学校の先生とかホストマザーは携帯電話
のことを“mobilephone”と呼んでいたよ
うな覚えがあります。((回答))ア、たしか
に。僕もそんな言い方を聞いたことがあり
ます。

学生からの情報の提供。シェアしようとする
姿勢がはっきりと見えている。

5-c-2-2 ((問))同じく《4-c-2-6》に関連して。
わたしの知り合いのアメリカ人はみんな、
ポケベルみたいなものを『ペイ
ジャー(pager?)』と言っていました。((回
答))そうですね、大量の文字を送信する
ことが可能になって「これはもう従来の『ブ
ザーによる呼び出し器』の枠をはるかに越
えた」という段階で、“pager”という呼
び方が普及し始めました。たしか商品名
だったはずですが、現在では普通名詞に
なっているようです。“beeper”が“beep”
『ピーッという音(を出す)』からできた
言葉であるのに対して、“pager”という
言葉は『(ホテルなどでボーイに)人を搜
すのに名前を呼びまわらせる・駅などで放
送や拡声器によって人を呼び出す』という
動詞“page”からできたのだそうです。

絶えず前進していく社会。とりわけ情報化社
会における時の流れは急で、新しい言葉がつき
つきと作り出される。古くからある言葉が突

然、新しい意味を表すべく再登場することだである。ここでは“page”という英単語の源がギリシア語の『少年』にまでさかのぼることも、補足説明しておいた。

5-c-2-3 LUNACYまたはLUNA-C、またはLUNA SEAとかいうグループについて(〔回答〕)グループ名が“LUNA SEA”であるとの指摘を受けました。同時に「まだアマチュアの頃は“LUNACY”だったらしいけど」との情報もいただきました。何にしてもこのグループが“lunacy”という単語を意識して名付けたであろうことは、間違いないと思われます。もし『月の海』という意味を表したかったのなら、“LUNAR MARIA”という英語を使っていたはずですから。

*個人的な意見としては、へたに中途半端な(和製)英語の知識でいじくりまわすぐらいだったら“LUNACY”のままのほうが良かったのに、と思います。

学生たちの多くにとって、音楽は日常の必需品のようである。しかし日本の若者むけの音楽業界は、ほぼ完全に英米のヒット曲追従タイプ。必然的にグループ名も曲名も歌詞の中にも英語(の切れ端)だらけ、というすさまじい状態にある。“MR. CHILDREN”(略称『ミスター!』)とか『ポルノグラフィティ』などというグループ名は、いったい何を意味しているのだろうか? 飛躍するようだが、言葉が無意味な記号になってしまっただけ、という点での共感を得たいと願う。

次に「c」外来語(カタカナ語)の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。3)「カ

タカナ英語」の発音のズレや語義の狭まりなどをのり越え、標準的な発音と英語圏での一般的な語義の理解に近づけようとする、弛みない気配りと実践」に関わる学生たちの意識(認識)の変化について、考察してみる。

5-c-3-1 (〔問〕)『財布』の意味の“ウォレット”と“パース”の違いは?(〔回答〕)英語の“wallet”と“purse”のことですね? 前者は『札入れ』と呼ばれるもので、たいていは革製です。後者は『ガマグチ』と呼ばれているものまたは婦人用の財布のことですが、特にアメリカ英語では婦人用ハンドバッグを指すこともある、言葉です。

カタカナ語の、英語での正確な意味を知る必要がある。特に類語がある場合には。

5-c-3-2 (〔問〕)同義語や類語の使い分けが難しいのですが?(〔回答〕)例えばほめ言葉をとっても、great, wonderful, beautiful, splendid, gorgeous, marvelous, cool, excellent, terrific, nice, neat, goodなどたくさんあります。ことからの性質や相手の立場・年齢などの状況に応じて、丁寧さや感動の大きさを表すことが望まれます。ニュアンスをとらえましょう。辞書をよく読んでみることも良いですし、native speakersに尋ねてみるのも良いでしょう。少しずつ慣れていくしかありません。

直接にカタカナ語について尋ねているわけではないが、質問者が挙げていた例もまた回答の中でとりあげた「ほめ言葉」のほとんども、カタカナ語または日本人の英語学習者にとってカタカナ語も同然のもの、である。大部分は聞いたことのある語だ。しかし、ニュアンスによる使い分けが難しい。

5-c-3-3 ((問))「ストーブ」は調理用で台所にあるものを指す、ということを知りましたが、「日本でストーブはリビングにあって暖房用なんだ」ということを外国の人は全く知らないんですか？(名前が同じでも)自分たちの国でのものと日本などで使われているものとは違うこともあるんだ、という認識はあるんですね？((回答))残念ながらそういう認識はほとんどない、と言っていいでしょう。いや、もし違う言葉で表現されているものだったら「なるほど、そういうものがあるのか」と興味をもって注意深く受け止めてくれる可能性が高いのですが(たとえば「七輪」とか「囲炉裏(いろり)」とかだったら)、この場合は英語からの外来語ですから、当然「本来の意味」で使われていると思い込んで受け取られる可能性のほうがきわめて大きいのです。僕たちだって、外国で“sushi”が健康食品としてとても人気があることとか“kimono”が化粧着としてよく着られていることなどを、知らない人って多いでしょう？

次のアメリカ英語とイギリス英語のズレについても同じことが言えるが、語の形も発音もまったく違う場合ならば「分からない」か「情報を得て、分かる」かのどちらかであるが、見かけが同じであったりよく似ている場合にこそ、誤解が起きるのである。

5-c-3-4 ((問))「カタカナ英語」で、アメリカとイギリスとで違う言葉が日本語に入ってきたりしているのがありますよね？という事は、アメリカ人とイギリス人が話すと通じなかったり誤解がおきたりするんですか？((回答))そういうこともあり得ます。同じものを別の言葉で呼ぶ場合には「通じ

ない」ということもあるでしょう。例えば日本語の中の外来語で「ポテトチップス」と呼んでいるものは、アメリカで“potato chips”と呼んでいるもののことですが、イギリスでは、“potato crisps”と呼ぶのです。さらに、実はイギリスにも“potato chips”と呼ばれるものがあるのですが、それはアメリカでは“French fried potatoes (French fries)”として知られているものなのです(日本ではどちらも違う「フライドポテト」という呼び方をしています)。通じなかったり・誤解がおきたり、しそうでしょ？“garbage can”(米)“dust-bin”(英)[収集車にもっていってもらうために道路に出しておく「ゴミ入れ」のこと]とか、“hood”(米)“bonnet”(英)[自動車の「ボンネット」のこと]などなど、違う呼び方(名前)のついた物が、けっこうあります。また同じ言葉で別のものを指す場合も、いくらかあります。

“corn”は米語では「トウモロコシ」を指しますが、イギリス英語では「小麦」のことです。本来は“corn”が小麦、“maize”がトウモロコシを指す言葉だったのですが、アメリカ人たちが“maize”を“Indian corn”と呼び、やがて“corn”と呼ぶようになってしまったのです。“subway”【地下鉄】(米)【地下道】(英)、“first floor”【一階】(米)【二階】(英)などの違いは、よく知られています。

カタカナ英語の活用の際には、アメリカ英語とイギリス英語の違いだけでなく相手次第でオーストラリア英語にもマレーシア英語にも気配りが必要なわけで、お国柄や土地柄さらには世代的な特徴などを反映した「さまざまな英語」があるということに、気づいていなくてはならない。

§ 6 むすび

本稿の目的であった、「英語学習者に発話への積極的な姿勢をもたせ・かつその方向性を確かなものにしてやりたい」という願いの視点からの分析と検証による『フィードバック方式』の実効性確認と、さらにこの方式によって与えられた情報がどのような意識（認識）の変化を学生たちにもたらし得るかについての考察は、果たして首尾よく十分におこなわれたのであろうか。具体的には、§ 2 で述べた「肝要と考えられる」諸点に関わる § 4 および § 5 での分析と検証そして考察が十分に説得力をもつ内容であったか否か、諸点は正しく肝要であったのかどうか、ということであるが、究極的にはあるいは本質的な問題としては、講義に参加し教授者とともに学びの場を作り上げてきた学生たち一人一人の発話への姿勢や方向性にどのような変化が起きたのか・「事実」に俟つ」という問題であるということ、一言述べておきたい。

とはいえ、良き学びの場としての講義をめざす実践は実践として、本章においては § 2 で挙げた各点についての論述のまとめをおこない、むすびとしたい。

a) 有効かつ有意義なコミュニケーションのために言葉はどうしても必要な道具であること・しかもその認識が欧米では特に強いこと、に気づかせることが重要である。

教授者が問題にしようとしていたのは「欧米人の、本来の『会話』への認識と思われる『相互理解のためには言葉で表現することが最善であり、沈黙は思考の停止または話題への無関心もしくは相手との対話の拒否を意味する』というところえ方・解釈の仕方をどう受け入れるか」ということであった。すなわち「今もし、ある会話が英語文化圏において英語でおこなわれようとしているのならば、原則的には英米人の『会

話観』に則らざるを得ない」という考え方を、提示したのである。そうしなければ、伝達内容についての誤解・無理解あるいは錯誤を招きかねないばかりでなく、無意識のうちに人格に対する誤解さえ生じかねないのだから。

「モード切り替え」の大切さは、シェアできたと思われる。ただ「できるだけ母語話者の側に学習者たちの「モード切り替え」の大変さへの理解と許容度を高めていく姿勢がほしいし、また立場が逆の場合には私たち自身がその理解と高い許容度をもつよう心掛けるべきである」との認識が全体にシェアされるまでには、至らなかったようである。

b) 発音や文法面での多少の言い誤り（または非標準性）は許容される場合が多くまた語彙選択の不適切ささえ（多くは相手からの問い返しによる確認を必要条件としつつも）許容され得ること、をしっかりと認識させる必要がある。

いわゆる『ロンドンの下町なまり』がイングランド南東部の広い地域に源をもち決してそれほど「地域限定」ではないこと・オーストラリアやニュージーランドではそれらが標準的な発音習慣となっていること、に代表されるような英語の多様性を認識させることにより、多少の言い誤りや非標準性は許容される場合が多いことに気づかせようとした。

また、ほとんどの学生が方言とは思ってもいなかった幾つかの言葉をそれと指摘することなどにより、完璧な「標準語」話者など日本人にも英米人にもあり得ないことに気づかせ、「〇〇らしさ」を保ちながら多様性を楽しみ合うことの大切さを、伝えた。

質問や感想などから、いずれの「気づき」もとてもうまく実現できたように思われる。また『マレーシアエッセンスのある英語』についての学生からの情報提供は、教室中に静かな感動

をもたらした。感謝である。

c) 外来語（カタカナ語）の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。

1) 英語以外の外国語（＝オランダ語やドイツ語・フランス語など）からの外来語の識別と、標準的な英語表現の習得

カタカナ書きされることが普通になっている外来語には英語以外の外国語からのものもずいぶんあることに、気づいてもらわなくてはならない。すると「ならばそれを英語で言えばどんな言葉になるのか」というのが、学習者たちがとても知りたがることである。

興味深いことに、外来語にはカタカナ書きのものばかりではなく漢字で書かれたものもあることに気がついてしまうと、その漢字表記は「当て字」なのかそれとも実は中国語からの外来語だったのかというところまで話が進むことが、よく起きた。日本の文化について考え直してみる機会にも、なったようである。

c) 外来語（カタカナ語）の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。

2) 和製英語の識別と、標準的な英語表現の習得

実に実にたくさんの和製英語があり・それらになじんでしまっている私たちであることに気づかせたかった。英語だとばかり思っていた・信じて疑うこともなかった言葉たち。勝手に短縮してしまった言葉の数々。さらにそれらを組み合わせた、英語もどきのあれこれ。音楽グループ“GLAY”はなぜ“GRAY”ではないのか、“Beatles”と“beetle”の違いなどとはとても同列には論じられない“L”のもつ英語っぽ

さを求めた」ことが象徴する、悲しみ。

和製英語だらけの日常の中で、「その意味することを考える」というのはかえって難しかったのかもしれない。ともあれ、たくさんの標準的な英語表現の習得がなされた。

c) 外来語（カタカナ語）の知識を活用させること。具体的には、活用を可能にする3つの作業をたびたび意識させること。

3) 「カタカナ英語」の発音のズレや語義の狭まりなどをのり越え、標準的な発音と英語圏での一般的な語義の理解に近づけようとする、弛みない気配りと実践

破裂音の場合の無声化・その逆の例はかなりある。綴りを「ローマ字読み」してしまう例も多数あり、でもそれは決して「ローマ字（の指導）」そのものが悪いわけではない。また「英語らしい発音」とは何かを考えるとまたもや「許容度」の問題になってしまうことに、気がつく。国際（共通）語としての役割という点を重視すればおのずと見えてくるものはあるのだが、学生たちは果たしてそのことが「見えた」のかどうか。

頻繁に辞書をひいてみること・具体的な文章や発話の中での意味をしっかりとらえること。語の強さアクセントの位置・ある長さをもった句や文の中での「英語的」な強弱のつけ方などの実際的な発音のコツを、テープやCDを繰り返し聴いて身につけること。かなりのことが学べたようではあった。一時的でないことを願う。

以上、§2で挙げた各点についての論述のまとめをおこない、ここに【フィードバック方式】の実効性が確認され、またこの方式によって与えられた情報がどのような意識（認識）の変化を学生たちにもたらし得るかについてのいささ

かの考察ができたものと、確信する。また同時に § 4 と § 5 の分析・検証・考察およびこの「まとめ」によって「肝要と考えられる」諸点が正しく肝要であったことを論証できたものと、確信する。

・小林 健『脱くホンモノ英語症候群>のすすめ』(大修館書店 1996)

注

- 1) 坂内正 1997『講義内容の即時的改善のためにー「毎時間のカード提出方式(フィードバック方式)」による理解度チェックと講義内容改善の試みー』北星学園女子短期大学紀要第33号 pp. 97-104
- 2) 中国語からの外来語はあまりにも多すぎて、ここで例として挙げている『馬』や『椅子』を含めて、もともと日本語にあったものと信じて疑わない人が多い言葉で実は中国語からの外来語というのは、いくつでも指摘できる。朝鮮語からの『味噌(蜜祖)』もまた、驚きである。両国と日本との長く深い結びつきが、うかがわれる。
- 3) 『トロッコ』と『トラック』が英語の“truck”への二重訳語(カタカナ語)であり、また同様に、“sheet”をもとにして『シーツ』および『シート』という外来語ができていたという話もしているので、質問はそのことについてのものだった可能性もある。しかしその場合でも、回答の趣旨はほとんど変わらない。

論述にあたり参考とした文献

- ・遠藤八朗 編『日本人の英語 外国人の日本語』(三省堂 1995)
- ・堀内克明 監修「現代用語の基礎知識」編集部 編『カタカナ・外来語/略語辞典』(自由国民社 1996)
- ・加島祥造『カタカナ英語の話』(南雲堂 1994)
- ・河出書房新社 編『ことば読本 外来語』(河出書房新社 1993)